

▽▽▽第24回MRA小田原国際会議レポート▽▽▽

『グローバル化する世界と私たちの責任 ～ 21世紀の目的と価値観を探る～』

去る6月8日(金)から6月10日(日)まで第24回MRA小田原国際会議が『グローバル化する世界と私たちの責任～21世紀の目的と価値観を探る～』のテーマの下、アジアセンター ODAWARAにおいて開催されました。海外からは、韓国、台湾、フィリピン、マレーシア、スリランカ、インド、そしてオーストラリアからの14名が来日しました。93年以来久しぶりにこの会議に参加されたフィリピンのダンテ・カルマ氏は学生運動の指導者であった1955年にMRAに出会い、日本との和解と交流を続けてこられました。今回はご夫人と孫娘さんを同行されました。その他、日本在住の中国、ポーランド(オーストラリア)、そしてイギリスの方々を含め、全部で70余名が参加しました。

◇グローバル化する世界と私たちの責任◇

開会式の基調講演で、相馬雪香国際MRA日本協会名誉会長は、次のように話しました。『今日ここに、11ヶ国の方々が共に集い、世界のことを考える。自分を忘れて、自己中心になるのを止める。そういった気持ちでお集まり頂いているということを実に有り難いと思っております。』

今の日本の在り方、本当に閉塞状態で恥ずかしい限りでございます。やはり、世界にお役に立つ日本でありたい。世界のために役だつ日本になった時、日本の国民が幸せになり、本当の国益となるのではないかと思っております。

私がMRAに大変興味を持ちましたのは、「ただ罪



●開会式で講演するランカスター氏

人(つみびと)のために」という本を読んだ時です。聖人君子の集まりだったら、私のいる所はない。けれども、罪人でも、その人が変わることが出来る。それなら私の場はあるというふう感じたことでございます。

■主な内容■

◆第24回MRA小田原国際会議』レポート・1-5P

◆MRAワールドニュース・8P

◆CRT部会ニュース・6-7P

◆事務局便り・8P

◆MRA国内ニュース・8P

◆大越俊夫氏講演要旨・別紙

本当に私のように、何も出来ない人間が、何かをさせて頂く。それは、ブックマン先生に教えて頂いたように、己を見ること。ブックマン先生のお言葉を借りれば、神の目をもって自らを見る。当時の私には、そのような難しいことは分からなかったけれども、自分が勝手に見る自分ではなく、鏡に照らしたような自分、悪い所も見る、そして、悪い所があるからこそ、そこが変われる。変わる時に、そこに力が出る。私が永く付き合っていた友人ですけれども、「相馬さんはいいわねー、変わる所が沢山あって」とおっしゃいました。その通りだと思います。そのために、頭を下げることを学ぶ。毎日のようにそれを学ばなければならない自分でございます。そして、そのことを通して、世界とのネットワークがつながる。人種を超え、年齢を超え、あらゆることを超えて、心の通いが出来るということ。己の間違いをまともに見る。そういう自分であるように、そういう国であるように、そういう国によって世界の仲間入り出来るというふうに考えております。

わずか三日間の会議ですが、その間に皆様方のお心の中に、新しい芽生えが生じますことを、そして、それが一生続く、役立つものであることを、念じております。』

続いて、オーストラリアのアンドリュー・ランカスター氏（MRA専従）は、次のように語りました。『グローバル化する世界と私たちの責任、グローバルライジング、レスポンスビリティの意味というのは、明確でありまして、地球全体の、或いは万物の、或いは人類全体の責任を受け入れるという意味です。つまり、違った見方をしますと、自分がとる責任というのには、国境や境界はないということです。フランスの大きなNGOであります、MSFの言葉を借りますと、境界、或いは国境のない責任とでも言いましょうか。英語の文法の先生であれば、これは地球規模化するという動詞の進行形であるというふうに言うかも知れません。つまり、この言葉は現在起こっており、まだ完了はしていないということなんです。その良いところは、その継続している過程の一部に我々がなることが出来るということ。そしてMRAはそれをどのようにしてゆくかを教えてください。

国際的にいわゆる環境運動をしている人達というのは、スローガンとして、地球規模で考え、地域で地に足の着いた行動を起こせということを言ってきました。しかしながら、最近オーストラリアでの環境活動家の国際会議で言われていることは、地球規模で考え、地球規模で行動するということだというふうに書いてありました。しかしながら、勿論、この地球規模

で考え行動すると言うことは良いことですが、少なくとも自分がその行動を起こしている場合、自分がそれに適合した活動をしていればという前提が付きます。つまり、我々の言っていることと、やっていることに矛盾がないということが大事なのです。これがまさしく、21世紀の一つの価値を導いてくれるものです。つまり、私の周囲にいる人達に、どういうふうに対応してゆくかということが、まさしく、すべての関係にとって、行われるパターンと同じでなければいけない、ということです。

更に“グローバル化する世界と私たちの責任”にはもっと深い意味もあります。私がとる責任というのは、全体を包含していなければいけない。この中には、自分の歴史観も含まれます。例えば、私の国オーストラリアの例をひもといてみましょう。国家として、100周年を迎えたばかりです。100年前の更に110年前に、ヨーロッパから移住がなされた訳ですが、当時は既にかなり多くの先住民が、この土地にいました。以来、210年間、オーストラリアでは、嘘と不真実がはびこっていたわけです。この嘘というのは、法律の学説の中にもテラナリアスという言葉で示されていますが、これはラテン語で無人の土地であったということを意味しています。

然し、8年前になります。法廷でこの考え方が覆されました。つまり、ヨーロッパから移住が行われた時にはもう既に、沢山の先住民が住んでいたという事が認められた訳です。これは非常に歴史的に大きな判決でした。そして、当時、アボリジニの子供達が、家族から引き離されて、通常、何百マイルという遠いところにある白人の施設に入れられ、英国の習慣とか、言語を学ばされたことに関して、国の調査が始まっています。非常に悪いことに、彼等は自分達の言語を話す事が許されませんでした。そして、多くの子供達は、2度と自分達の家族と会うこともありませんでした。

オードリーという友人がいますが、彼女も同じように、4才の時に母親から引き離されました。24年後に、やっと母親と会うことが出来たオードリーでしたが、母親は英語がしゃべれず、彼女は英語しかしゃべれないということで、母親と会話を交わすことすら出来ませんでした。オードリーは、白人のオーストラリア人の後継者となるべく育てられたが、白人にも受け入れられず、アボリジニにも受け入れられない、と言っています。これ以上、苦痛を伴う経験があるでしょうか。何十万というアボリジニの子供達が、こうした経験をしました。

4年前に政府が委員会を指名しまして、これに関しての調査が始まっています。そして、この委員会のレ

ポートのタイトルが、「盗まれた世代」というタイトルになった時に、初めてこの「盗まれた世代」という言葉が、オーストラリアの一つの単語となりました。この3年の間に、沢山の「盗まれた世代」の人達がMRAが行っているスイスのコーの世界会議に出席しました。そして、オーストラリアに帰ってからは、沢山のひとと一緒に和解のための運動を始めています。この和解はアボリジニとアボリジニではないオーストラリア人の間に行われる和解であり、この活動を「癒しのための旅」と呼んでいます。

この活動の中で一つ、大きなことが起こりました。1年前のことですが、25万人のオーストラリア人が、シドニーのハーバーブリッジを行進し、この和解への支持を表明しました。シドニーは東京やソウル、カルカッタやコロンボのように大きな都市ではありませんので、この25万人という数は非常に大きな数です。多くの国で新聞の見出しとなりました。そしてこの和解はオーストラリアに必要なものとして、政府、そして多くの国民、また報道人に受け入れられています。

この、グローバル化する世界と私たちの責任ということの、完全な意味は、自分とそして自分の国を正直な目で見ると。そして、私が他の人に期待をする基準を、先ず、自分、或いは自分の国に当てはめる。そして、自分の良心、心の声、或いは神の声を、自分、或いは自分の国に反映していく。チームを構築する。そして、世界の隅々まで新しい精神をあまねく行き渡らせるということだと思えます。』

◇ 21世紀に求められる心の豊かさ ◇

翌朝は、マレーシアのジュリー・タン (MRA専従) さんから、静かな時間を持つことの意味の説明があり、その際に、“ルック・アップ、イン、アウト”の順に行ってみようとの話がありました。つまり、先ず全ての恵みを神仏に感謝し、次に自分自身を見つめ直し反省



● “静かな時間”の説明をするマレーシアのジュリー・タンさん



● 各国の歌や踊りが披露された楽しい夕べとなった

する、そして、更に他の人々のために具体的に出来ることを考え行動に移そうという意味です。続いて、27年に亘り5000人余りの不登校生と関わってこられた、大越俊夫師友塾塾長より、『21世紀に求められる心の豊かさ—魂の教育を求めて—』のテーマでの素晴らしい講演(要旨別紙)が行われましたが、会場の参加者からも大変率直な深い体験が語られ、大きな感動を残すものとなりました。

引き続き、『21世紀に求められる心の豊かさ』、『和解への課題—近隣諸国との関係』、『大切な人生を考える』の三つのテーマで、小セミナーが開催され、教育問題、国際関係等に関して、それぞれの考えを率直に述べ合う機会を得ました。

更に、少人数に別れて、心を開いて自由に話し合う時間をもたれたあと、CRT部会主催による『ビジネスを通して社会を変える』の講演会(詳細別掲)が開催されました。

夕食後は、早稲田大学の大学院に学ぶ中国の画家、王凱さんによる素晴らしい水墨画のデモンストレーションがあり、続いて各国の代表による歌や踊り等が繰り広げられ、楽しい一時を共に過ごしました。

◇ お互いの体験の交換に学ぶ ◇

翌、最終日である日曜日は、先ず朝食の前に、台湾のグレース・リュウさん (MRA専従) が、静かな時間を持つ際、MRAの四つの基準(絶対正直・純潔・無私・愛)を鏡にして、心に浮かぶ考えを書きとめること、そして、その考えを実行することについて話され、MRAの生き方は私の幸せの原点ですと語られました。

『21世紀の和解のかぎを求めて』の全体会議では、海外からの代表がそれぞれの体験を話してくれました。スリランカのロシャン・ドダンウェラ氏(現在ロンドンをベースに、MRA研修生としてスイス・コーでの「和解への課題」の会議の開催のためのコーディネーターを務める)は、次のように語りました。

『祖国スリランカは過去18年間民族紛争が続き、これまでに6万3千人ほどが亡くなり、国が受けたダメージは計り知れないものがあります。毎日戦いが続き、将来の見通しは立っていません。紛争の原因は複雑なのですが、簡単にご説明したいと思います。』

内戦は対立する2つの勢力によって闘われています。一つはスリランカ政府、そしてもう一つは、イームム・タミル（解放の虎）、いわゆるタミル・タイガーと呼ばれる人々のグループです。このグループは、国の15パーセントを占める少数派のタミル人の若い男女から構成されています。このグループの目的は、タミル人の独立した州を作ることにあります。その一方で、国軍の兵士の多くは、国民の75パーセントを占める、大多数派のシンハリ人です。このタミル人とシンハリ人という2つの民族は、言葉も宗教も異なります。また、少数派のイスラム教徒もおりますけれど、この紛争には直接係わっておりません。

私がスリランカに望むことは、国の平和であり、また、国が一つにまとまることです。国民の多くは戦争に疲れ切って、その終結を望んでいます。現在は、ノルウエー政府が仲介して、平和の促進のために一役買ってくれています。国の政府とタミル・タイガー、二つの対立し合う勢力は現在、どのような交渉やアプローチをするべきか、さぐり合っている、非常に微妙な段階にあります。然し、私は双方とも暴力の無意味さに気付きつつあると思います。

このように、若い人々がどんどん死んでゆく中、国の将来、そして将来の世代はどうなるのでしょうか。今後コミュニティーの再建のために、我々は全力を尽くさねばなりません。民族の違いはどうあれ、平和の中で生きたいという、切望は変わらないのです。民族の違いを大切に。それ自体には意義があると思いますが、然し、本当に深いところでは、お互いを人間として認め合うべきだと思います。



●小セミナーの様子

私自身は和解とは、まず、個人ベースではじまると思います。最終的に社会や国のレベルの和解が行われるとしても、先ず最初、スタート地点は一人一人の心の中だと思います。また、自分の行動に責任をとることも大切です。そして、グローバルな地球規模の考え方をすることです。

私がMRAで働くようになってから、1年半が過ぎました。この間、私の今までの価値観が根本から崩されました。もっと広い考え方が出来るようになり、自己中心的な考え方を改めるようになりました。また、自らの命の危険も省みず、困難な状況に立ち向かう人々に会い、また、自己改善のために日々努力している人々に会って、私自身も勇気を頂いています。基本的に人間は同じであり、また、問題を解決する能力を持っているのは人間であるという思いを深くしています。』

次ぎに昨年5月に開催されたこの小田原会議にも参加した、台湾のビクター・クン（MRA家庭EQセンター・ダイレクター）さんからは、昨年6月に台湾MRA協会の支援のもと、リユー・レンジョウ氏と共に「MRA家族EQ開発センター」を開設し、「効果的な親となるためのトレーニング」といった母親父親を対象とした多くの講座を始め、多くの家族の問題解決に貢献していることが報告されました。自分のやりたと思っていたことが実現したことをふまえ、参加者にも、夢を持つよう、また、夢の実現のために努力するよう励ましました。

続いて、この「MRA家族EQ開発センター」のコースを受講した台湾のココさん（愛称）が次のような感動的な話しをしてくれました。『私はシングル・マザーで、8才の息子を持っています。現在は幼稚園の子供達に英語を教えています。3年前までは、私の人生は夫と子供を中心に据えたものでした。当時、幸せな家族を持ちたいというのが私の夢だったので、それは不可能な夢でした。』



●中国の伝統舞踊を踊ってくれたリユー・シャオユンさん

どんなに夫に早く帰ってきて欲しいと望んでも、夫は早く帰っては来ませんでした。そして、夫が浮気をしていることを知った時は、非常にショックでした。怒り、悲しみ、そして、落ち込みました。

毎日、母の所に行き、泣いて文句を言い、何でこんなことが私に起こっているんだと聞きました。「私が何か悪い事をしたの？」 然し、母親はそれに答えてはくれませんでした。 答える代わりに、私の離婚の支援をしてくれましたし、息子の面倒も見てくれました。この問題で私が深く傷ついたために、息子にも影響が及ぶのではないかと大変心配しました。これを避けるために、私は親と暮らさなければならぬと考えました。然し、それは簡単なことではありませんでした。というのも、もともと家を離れたくて結婚したからです。然し、最後には家に帰ろうと決め、両親と一緒に暮らすことにしました。その後、リユー・レンジョウさんが開催している、この「効果的な親になるためのトレーニング」に参加しました。そして、私の母親が自分の気持ちを全く表に出さないということに気付きました。母もまた、私が傷ついたので同様の経験をしていたことが分かったのです。

然し、このコースをとっている間に、母親の轍を踏んではいけないということに気が付きました。そして、自分自身の将来を自分の手で築こうとしました。私は常に学んだことを必ず母親と姉と妹に相談し、話をします。MRAのこのEQコースを妹と共に継続して受講しました。そして、弟も、「心の声を聞く」というスタディー・コースに私たち2人と共に参加しました。その後、自分が英語を教えていた子供達の親を私の家に呼んで、一緒にEQコースを行いました。それら沢山のコースに参加したことが、色々な結果を生みました。母親は、初めて、直接、父親に対して自分の気持ちを話すようになりました。そして妹も、学位を取るために勉強を進めることにしました。弟も、父親と、初めてコミュニケーションがとれるようになりました。勿論、まだ毎日、問題にはぶつかりますが、その問題を解決する方法、対処する方法が今では分かっていますし、お互いに話しをする、コミュニケーションをすることが出来るようになりました。』

最後の閉会式では、それぞれ20分間自由に『静かな時間』をもった後、参加者がこの会議の間に考えたり決心したりしたことを次々と述べていきました。

『今、中学、高校で英語を教えています、受験のためだけのことを教えるだけではなく、それ以上のものが人生にはあるんだということ、生徒に教えようと決心しました。それが何であるかまだ分かりませんが、何かのプロジェクトを子供達に与えて、もっと認識を高めるような、何かをしてゆくことを決心しまし

た。』(ロブ・ニール氏、イギリスから来日し、静岡県で英語を教えている)

『私の決心は、受動的態度から、能動的態度をとることです。そして、先ず何よりも、昨日から参加しておりますが、皆さんとお会い出来て、そして皆さんのお話を吸収出来た事を喜んでおります。吸収できる、つまり、自分で感ずる事が出来る、自分の命に、先ず第一番に感謝して、その感謝を、これから行動に表してゆきたいと思っています。今日のシェアリング・グループで、皆さんにお話して、そして皆さんから、お褒めの言葉を頂きました。それはどんな言葉だったかといいますと、これから、色々な人と出会ってゆくであろう、また、これまでも色々な人と会って来ました。その時に、自分自身が、不快感を感じる。その時に、私が自分で作った言葉、きっとどなたかから頂いた言葉であろうと思うんですが、「人にはそれぞれ事情がある」この言葉を自分に与えますと、すっと落ち着く私を見出しました。これからも自分自身の研究も活かして、MRA精神を実行してゆきたいと思っております。』 (金生郁子さん)

会議における、マレーシアのジュリー・タンさん、台湾のグレース・リュウさん、インドのジョティ・スブラマニヤンさん、そして、日本のマリアンネ・和田さんというアジアの女性4人のチームワークと活躍振りが印象的だったとの声も聞かれました。

最後に、相馬雪香名誉会長の次のような挨拶で本年の会議を終えました『いろいろ良いお話を伺って、皆様、お心がいっぱいだろうと思います。日本を信頼して下さった外国の方々がおられました。ブックマン先生もそのお一人です。日本が、本当に、そのあるべき姿になるためにも、MRAというのは、決して外国から来たものではなく、日本でも、どこの国でも、古来からある誠、それをお互いが活かすことだと思っております。それを教えて頂いた。私たちがボンヤリしてるから、教えて頂かなくてはならなかった。しかし、それを、あらためて有り難いと申し上げます。』

お一人お一人の力というものが、どれだけ、世界を動かすことが出来るかは、これからの皆様方の、行動にあると思います。

これで、24回目の小田原会議は終了しますが、これが始まりでございますから、これで終わったなどと思いにならず、しっかり、始めて下さるようお願い致します。』 (了)

▼▼CRT 部会ニュース▲▲

◇第24回MRA小田原国際会議の中でCRTのメンバーによる講演会を開催◇

去る6月9日(土)の午後4時から6時半まで『ビジネスを通して社会を変える』のテーマでコー・経済人円卓会議(CRT)のメンバーによる講演会がアジアセンター小田原の箱根ルームで開催されました。

稲岡稔イトーヨーカ堂常務取締役の「CRT日本委員会の活動内容について」の報告に続き、基調講演として桑山三恵子資生堂法務部次長からは、「社会が企業を変える、そして、社会が変わる」をテーマに同社の企業倫理活動への取り組み状況が紹介されると共に、社会貢献活動の様子がビデオにより紹介されました。その中でも心のバリアフリー社会の実現に貢献するために、資生堂の社員がある老人ホームで年配者のご婦人にお化粧をすると、たちまち生き生きとした表情に変わって行った場面が特に印象的でした。

その後、稲岡稔イトーヨーカ堂常務取締役のリードの下、多様な立場からの意見発表が行われました。経営者として近藤久三愛光電気名誉会長が、「価値ある企業を目指して一価値ある企業として地域社会に貢献する」のテーマで話されたのに続き、社員の立場から元銀行員の石田寛氏(現CRTアシスタント・コーディネーター)が、「社会システムの変革を求めて一ソーシャルイノベーターの役割について」、消費者の立場から藤田寿子氏が、「消費者の立場として企業に求めるもの」、そして最後に法律家の立場から高城俊郎弁護士が、「法律家の観点から見た企業の問題点」というテーマで、それぞれ考えを述べられました。特に近藤久三愛光電気名誉会長は、ウラジオストック及びサハリンから選抜された25人のロシア人経営者を研修するために経営管理研修会を日本で開催したことを話されましたが、グローバル・スタンダードで地域社会に貢献されている姿に感銘を受けたとのコメントが参加者から寄せられました。



●講演中の近藤久三愛光電気名誉会長と他の講演者の方々

◇経済人コー・円卓会議(CRT)日本委員会主催の勉強会を開催◇

去る5月10日(木)及び6月22日(金)の2回に分けて『企業評価の新しい基準—ステークホルダーと資本市場が決める新しい格付け基準—』のテーマでCRT日本委員会の勉強会が開催されました。

この勉強会は、去る4月13日に開催されたCRT講演会と同じテーマとしましたが、実務者の方々を対象に、より内容を深めると共に、質疑応答の時間を設け活発な意見交換を行うことを目指して開催しました。

【5月勉強会のプログラム】

水尾順一CRTセクレタリアート・アドバイザーの進行の下、石田寛CRTアシスタント・コーディネーターの『経済人コー・円卓会議日本委員会からの活動報告』、大矢和子資生堂お客さまセンター所長による『企業倫理活動に関するこれまでの取り組みについて』、そして、谷本寛治一橋大学大学院商学研究科教授による『“良き企業行動”の評価』というテーマで、それぞれ講演がありました。

【6月の勉強会のプログラム】

水尾順一CRTセクレタリアート・アドバイザー(駿河台大学大学院教授)による『コーポレートガバナンスとステークホルダー・マネジメント』、又、川北英隆日本生命財務企画部長による『投資家からみた“良き企業”』、そして、岩田宜子ジェイ・ユース・アイアール(株)日本企業担当マーケティング部長による『外国人投資家による日本企業への議決権行使—システムの問題点と実態—』という各テーマでの講演がありました。

5月と6月の勉強会の参加人数は事務局を含めそれぞれ25人程でした。しかし、全員が企業倫理の問題に真剣に取り組んでおられる実務者の方々だったため、現在ご自分たちが抱えておられる問題点（社内での企業倫理の浸透と普及の難しさ）について、参加者同士での率直な意見交換を通して悩みの共有化を図ることもでき、大変有意義な勉強会になりました。また、参加された方々からは、このような意見交換が行える勉強会を継続的に開催して欲しいとのコメントも寄せられました。

◇ 2001年 第2回コー経済人円卓会議日本委員会主催講演会が開催される ◇

7月6日（金）の午前11時から午後5時まで「企業価値の新しい基準 —企業倫理を礎石として企業価値を高める—」のテーマでコー経済人円卓会議（CRT）日本委員会主催の講演会が、60名余の参加者を得て、憲政記念館にて開催されました。

水尾順一CRTセクレタリアート・アドバイザーの進行の下、橋本徹（社）国際MRA日本協会（富士銀行会長）並びに金子尚志（社）国際MRA日本協会・CRT副部長（日本電気相談役）の挨拶に続き、稲岡稔経済人コー円卓会議日本委員会主幹事（イトーヨーカ堂常務取締役）の「経済人コー円卓会議日本委員会より活動報告」があり、更に、田中宏司経営倫理実践研究センター主任研究員による「ステークホルダー・マネジメントと企業倫理」、犬塚敦統七福醸造社長による「企業価値を高める社会貢献活動」、そして、相田宗男富士ゼロックス総務部人権・エシックスマネジメントグループ長による「富士ゼロックスの企業倫理への取り組み」といったテーマでの講演が行われ、「企業価値の新しい基準 —企業倫理を礎石として企業価値を高める—」という当日の全体テーマに対しての様々な貴重な意見や実例を耳にすることができました。最後には主催者を代表して相馬雪香（社）国際MRA日本協会名誉会長が御礼の挨拶を述べました。



●左から田中、犬塚、相田の各講師

様々な企業からの参加者からは、「今後の企業倫理の推進に大変役立つ情報を提供して頂いた」、「実務者の事例紹介が大変参考になった」、「社員に対して企業倫理の考えを浸透させるためには、心を磨くこと、体験することが大切だと充分理解できた」等、企業倫理への関心の高まりを示すコメントが寄せられました。

（石田 寛記 CRTアシスタント・コーディネーター）

◆ 訃 報 ◆

大変残念ながら、CRTに関係の深いお二人の方々が、6月、7月に相次いで亡くなりました。お二人のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

◇ CRTの主要なメンバーとして長年にわたり活躍されたキヤノンの賀来龍三郎相談役名誉会長が去る6月23日に逝去されました。（享年75才）

1994年には、賀来会長（当時）の提唱された公正な競争と共存共栄の両立を目指す『共生』の理念を、欧米の価値観並びに倫理的理念と共に盛り込み、企業の意思決定に於いて道徳的価値が必要不可欠であることを強調した『コー円卓会議・企業の行動指針』が採択されましたが、これは、企業の行動指針規範を日米欧の民間企業経営者が共同で策定した初めてのケースでした。

◇ 平成9年1月より11年10月まで、3年近くCRTのコーディネーターとして活躍され、かねて闘病中であられた弊協会の清田和彦顧問が、去る7月14日に逝去されました。（享年61才）

【MRA国内ニュース】

MRA新会長に橋本徹理事が就任

去る5月24日に機械振興会館の会議室にて開催された臨時総会において、橋本徹 富士銀行代表取締役会長、及び林 宏 三菱信託銀行最高顧問の理事への就任が承認されました。(現在の理事数は定員の20名となりました。)

続いて別室にて開催された、第52回理事会において、互選により橋本徹理事が満場一致で新会長に選任され、橋本徹理事も新会長への就任を承諾されました。又、相馬雪香理事(前会長)が全員一致で名誉会長に推薦され、橋本徹新会長の就任の委嘱に対し、相馬雪香理事もこれを承諾されました。これにより、当協会の新しい体勢が整いました。

コーMRA世界大会に22名が参加予定

本夏のコー世界大会は、『グローバル化する世界と私たちの責任』の総合テーマのもと、7月5日から8月19日にかけて6つの会議が開かれます。

日本からは、後半の『和解への課題1—平和作りのイニシアティブ』、『恐れから愛へ—信仰の旅』、そして、『和解への課題2—グローバル化する世界と私たちの責任』の三つの会議を中心に、羽田孜衆議院議員、谷川和穂衆議院議員、そして、橋本徹国際MRA日本協会新会長を初め22名の方々が参加されます。9月のMRA例会の中で、この会議の参加報告をして頂く予定です。



MRAワールドニュース

世界のMRA—最近の動き

■ ガーナ

昨年、ガーナのMRA関係者が、NGOの一つとして「MRAガーナ」を登録しました。そして先月、ガーナ観光相の肝煎りで、「MRAガーナ」は印象深い式典をもって発足し、その模様はラジオ、テレビ、新聞でも報道されました。

昨年12月の大統領及び国会議員選挙の実施に先だって、「MRAガーナ」は公正な投票の為の趣意書を投票者、候補者双方の啓蒙の為に作成しました。2000年5月に、MRAと諸宗教団体の協力のもとに選挙浄化キャンペーンが行われ、その結果、選挙は非常に平穩裡に行われました。1957年の独立以来、クーデターではなく、初めて投票によって政府が変わったのです。

「MRAガーナ」は今、ガーナ反腐敗同盟や国内和解プログラムを立案中の民主化促進センターのために貢献しています。ガーナ大学では学生達の小さなMRAグループが発足しましたが、そのうちの1人は、今年、コーのスカラーズ・プログラムに参加することになりました。また、MRAが作製した「自由」という映画がガーナのテレビで放映されることになっています。

(ベン・ガーブラー、及び、クワミナ・バイデン)

(前掲の記事はMRA World Bulletin 5月号の記事を翻訳したものです。)

バザーのお礼とご報告

去る5月27日(日)に浦和榎会館で行われました、女性の会(関東地区)主催のバザーにつきましては、皆様方の温かいご支援、ご協力をいただき、無事終えることが出来ました。お陰様で、収益の方もご寄付と合わせ約15万円となりました。誠にありがたく、厚く御礼申し上げます。収益のうち10万円は、先の小田原会議の資金の一部にと、MRA事務局へ寄付いたしましたので、併せてご報告致します。

今後共ご支援の程よろしくお願い申し上げます。

女性の会(関東地区)

事務局便り

◇2001年度の第3回CRT講演会は、来る10月19日(金)に経団連国際会議場を会場に、『企業評価の新しい基準—コーポレートガバナンスとステークホルダーマネジメント—』のテーマで開催される予定ですので、是非、ご予約にお入れ下さい。

◇現在のMRA事務局のメンバーの多くは、亡くなられた清田さんからパソコンの手ほどきを受けました。現在怪しげにでもパソコンを操れるのは清田さんのお陰と一同感謝しております。改めて、故人のご冥福をお祈り申し上げます。

◇厳しい猛暑が続いておりますが、皆様、呉々も御身ご自愛下さいますようお祈りしております。

【講演要旨】

『21世紀に求められる心の豊かさ

—魂の教育を求めて—



大越 俊夫師友塾塾長

1. 「不登校」の実状

文部省の公表では高校15万、中小14万の不登校生がいるとされているが、実態はその2倍。この27年間 師友塾をやって来て、不登校生のタイプは、4、5年毎に変わってきているが、どのタイプでも「非常に命が薄くなっている」ことが共通して感じられる。また、最近では不登校生の低年齢化が著しい。この流れは今後も変わらず、不登校生は増加してゆくと思われるが、そのことを私は悲しんでいない。むしろ喜んでいる。問題はその後。それをどう受け止めるかにある。

2. 師友塾の役割

- ①師友塾の働きは、学校に「行けない子」を「行かない子」にしていくこと。自分が学校に「行けない」事実と理由をはっきりと自覚し、言語化して、どうしても学校に「行けない」自分を受けとめられるように手助けをする。その上で、「僕は学校に行かず、新しい道を行く」と言えるようになると、その子は元気になる。
- ②親御さんが、是非とも学校に行かせなくてはいけないと言ってすがり付くから、子供が分裂症になる。私のようにわがままな大人がいて、子供は自分で育てると言う気持ちがあれば、この問題はすっと解決すると思う。
- ③戦後、経済発展至上主義の中で、日本の教育は、企業にとって都合のいい人間を作り出すための、ロボット大量生産工場だった。親が、愛という名のもとに、子供に安定した、豊かな生活を手に入れさせるために、受験勉強に駆り立てる。これでは普通の人間なら学校に行かなくなる。
- ④現在の教育の空間には、上品な、人間性の高い子供達は、生きにくいのではないか。愛情深い両親と、指導者として優れている先生の言うことを聞けない子が私の前に来た場合、その子をどのように、どのような気持ちで受け止めるかということ。そこが最も大事なポイントだ。

3. 師友塾の空気

- ①しかし、事実として、5千人に近い子供が私共の前で元気を取り戻してくれた。これにはコツがある。それは、空気だ。普通の空気はエアというが、そういう空気はニューマという。会社には社風が、家には家の雰囲気があるように、私共の塾の中に、塾風を作ればいい。すると、その空気が訪ねて来た子供達を包み込む。その空気の中で、子供がすくすくと育つ。命が濃くなる。そのために、塾長である私が、その最初の空気の作り手として、先ず自分の空気を、心の中の空気を乱さないようにしなければならない。
- ②師友塾のドアの外は世俗の空気。ドアの中は師友塾の空気。社会用語を使うと、ドアの外はメイン・カルチャー、中はサブ・カルチャー。ドアの外の独特の空気を言葉で表すと、弱肉強食。ドアの外の人々は、みな一所懸命努力している。どこに向かって努力しているかということ、最後に1つ、「所有」という日本語が残る。目的とするものを沢山得た人が、その量と同じだけ幸せだという錯覚のもとに、頑張っている。これは競争主義だ。ドアの中では、それをしない。ほんわかほんわか。幸せ観を変えなくちやいけない。私共を訪ねて来る不登校生は、とにかく、心萎えて、くたくたになってるから、彼等に先ず要るのは、ほっとする空気だ。癒しという空気。癒しがあって、次に遊び、次に学びがある。とにかく大越さんに会ったらほっとする、と言われれば、それはいい塾長。そのくつろいだところから、子供にエネルギーが出てくる。

③そのためには、遊びがとても大切。塾の中では思いっきり遊べないので、私は、来週から、約1か月間の北海道合宿へ行く。およそ80名の若者が北海道の道東に集まって、これで11年目になるが、夏に合宿をする。若い塾生達は3週間、少し年上の大学生レベルは4週間。この合宿は大変な教育効果がある。そこでは、大自然の中で、いろんな年齢層の仲間と交わりながら思いっきり遊ぶ。これで結果的に脳の発達がすごく出来てくる。

④5千人近い子供を見て、みんなそれぞれ違うが、3つの共通項がある。第1に彼等は動植物に対して、非常に優しい。生まれつき、エコロジカルな感覚を持っている。第2に、自分が元気でないのに、人の世話を非常にしたがる。不登校の子に、別の人のために起きなさいというと、起きる。利己の精神ではなく利他の精神を持っている。第3に、不必要な競争は嫌がる。この3つの要素をまとめて持つ人。それは人間性の高い人。不登校の子供達はこのような人にそっくりだ。だから、生まれつき人間性の高い子供が、学校に行きづらくなっているということ。それを、人間性の低い両親が、無理矢理、欲望の世界に引っ張ろうとするから、子供は閉じこもってしまう。学校に行かない子供の感覚を信じていいということだ。

4. 私の教育観

①師友塾は不登校した子に大検の資格を取らせるとか、高校卒業の資格を取らせるといふ、それだけではなく、全く新しいタイプの学校を目指して27年前に起こした。それは、教育の主眼を知の教育から、情の教育に移したためだ。

②大脳の新皮質が、I Qで、大脳の辺縁系がE Q。E Qは人間関係を結ぶ能力だと言われている。次に脳幹。ここにS Qがあるということが、最近解って来た。魂の指数と言われている。小さい時から、I Qだけの教育をし、テストだけの勉強をさせると、I Q主導の頭に、E Tみたいになってしまう。これでは、バランスが悪い。テストはいいかも知れないが、E Qは低い。やはり、まんべんなく発達させた方がいい。E Qを育てるにはどうするかと言うと、グループの中で、人間関係を持つのが一番。

③S Qには、なかなか難しい問題がある。教育学でいくと、知、情、意。知は知識。戦後、日本の教育は知識教育に傾き過ぎた。情というのは、色々あるが、隣人の悲しみを悲しめる能力。喜びを共に喜べる能力。それは大変素晴らしい能力だが、最近の若い人を見てみると、他人に関心のない人が多すぎる。その結果、他人に対して不都合なことをしてしまう。裏返すと、利己主義的になる事で、これは、性格ではなくて、脳の発達と関係がある。例えばお婆ちゃんが倒れると、思わず走り寄って、抱き起こすという情。惻隱の情だ。意というのは志。高い志。天職、天命に目を向けて、意義ある生涯を生き抜くぞ、という志は、意から来るが、今、志を持った若者が、殆どいない。それは大人がそれを見せていないからだ。

④知、情、の間に道徳を入れ、これらのベースとしてスピリチュアリティを入れる。そして、知、道徳、情、意、そのベースにスピリチュアリティをもって、バランスのある人間とする。日本の家庭、学校を見ると、このスピリチュアリティが殆どゼロ。それを根底に持って、知、道徳、情、意、が育っていかなければと思っている。

⑤このスピリチュアリティを開発するには、家ならば、両親が、それを意識して、子供を育てて行かなければいけないし、宗教ではこれは祈り。この子が健やかに育つようにと、朝夕、先ずお祈りをして1日を始める。この、スピリチュアリティは大自然と交流してゆく訳だから、これが発達すると、我々も大自然の一部だという事が分かってくる。その結果、自己中心主義が消えてゆく。私は大した事は出来ないけれども、朝に夕に、お預かりした子供達が、健やかに伸びてくれればと祈っている。幸い、私の考えに賛同するスタッフが、集まってくれているので、今のところ、この一つの方向で進み、その空気で子供を包んでいく事が出来ている。

(以上)

【講師プロフィール】

1943年、広島県生まれ。1975年「手垢のつかない若者教育の場」作りの情熱やみがたく大学講師の職を辞して、神戸に高校中退生のための「リバーアカデミー師友塾」を設立。4年前からは“引きこもり”の若者のための訪問機関「ハートケアフレンドセンター」を開設。月刊誌「パーサー」を主宰。著書に「心の雨宿り」他多数がある。

※尚、講師の考え方や師友塾についてを更に詳しくお知りになりたいという場合は、講師の近著「子どもが学校に行かなくなったら赤飯をたきなさい！」(サンマーク出版)をお読みになることをお勧めします。